最近のESRI研究成果より

# 国際共同研究インタビュー

東京大学大学院 経済学研究科 教授
松井 彰彦

内閣府経済社会総合研究所では、2025年以降に向けた財政・社会保障制度に関する国際共同研究として、持続可能な制度あるいは制度と市場の関係性の再構築について、内外研究者からの論文執筆協力を得て、実証的・理論的知見の拡充に資する研究を行いました。

今回は本研究プロジェクト主査の松井彰彦　東京大学大学院経済学研究科教授にお話を伺いました。

## ●国際共同研究プロジェクトの狙いについて

**――本研究プロジェクトでは、松井先生の「自立と依存の経済学」のお考え、広義の市場機能によって依存先が増えることによって人々の自立性が高められる、というお考えを出発点にしながら、現在の社会保障制度の先を見据えた研究を進めていただきました。プロジェクトの途中にお考えになったこと、今の到達点や、研究の狙いなどをお聞かせください。**

（松井氏）社会保障制度にしても、様々な制度にしても、この制度を使うとこうなるといった議論はあるのですが、制度間の連関や包摂性の十分性という点から考えると、もう少し違う角度から議論をしてもいいと思いました。主流ではない議論がもう少し重要で、それができればというのが一番の狙いです。逆に言うと、主流から少し外れた議論もかなりしているおり、むしろそれを聞いた方あるいは読んだ方が何か酌み取って、政策担当者なら政策に、研究者ならば研究のヒントとして生かしてもらえればいいかなというのが一つの大きな眼目です。

そういう意味では、何を狙っているかというと、何か制度を提案してこうしましょうよというよりは、こういう物の見方もありますよ、そうしたときにこうなりました、あるいは過去にこうなりました、あるいはこれからこうすればこうなりますというのを部分的にでもいいから示せれば一つの成功かなと思っています。

ただし、それは今まで行われた議論ではなくて、ちょっと目先を変えたような議論を提示できればいいかなと思いました。そのため、政策の現場に携わっている方ではなく、一線で研究を進められており、かつ、制度の問題や政策の問題に関心がある方にこのプロジェクトに参画をお願いしました。

また、今までやられてきた議論、もう浸透しているような議論ではなく、新しい示唆を何か与えることが一番の狙いで、我々がつくっている制度というものもこういうふうに考え直してみたらどうなるだろうかというのを考えるきっかけになればいいかなと思っています。

（松井教授）

## ●制度と市場の関係性について

**――制度とは何か、市場とは何か、マッチング、不確実性、「ふつうの境界」、といった本当にベースとなる御議論をいただきました。**

（松井氏）そういう意味では、主流かどうかというよりは、研究は常にそうですが、人と同じことをやっていては意味がないというところがあり、今までやられてきた議論、もう浸透しているような議論はそういう方にやっていただくとして、我々はそうではなくて、新しい示唆を何か与えたい。そこが一番の狙いと言えば狙いで、こういう考え方もあるなら、我々がつくっている制度というものもこういうふうに考え直してみたらどうなるだろうかというのを考えるきっかけになっていただければいいかなと思っています。

制度と言うと、特に官僚の方は、官僚がつくり上げたものをイメージしがちかもしれませんが、ここで言う制度というのは、人々の行動規範とか幅広の慣習とか、そういうものを含めた概念というのを一貫して取っていて、制度についてそこまで視野を広げて見ることが大事かなと思います。

一つのメッセージとしては、やはり経済学というのが社会科学の一つであり、社会科学の中でも経済学は理系に近

いとも言われますけれども、基本的には世の中を見る物の見方を提供している学問で、それはほかの社会科学の、今回であれば半分ぐらいは他分野の方を招いていますけれども、それもそういういろいろな物の見方を提示されている方々なので、それを学びながら制度というものを改めて考えてみようというのが狙いです。

経済学で話をすると、アダム・スミスが『道徳感情論』で「人間社会という巨大チェス盤においては、それぞれの駒がそれ自身の行動原理に従う。それは為政者が押しつけようとするものとは異なるものである。もしこれらの原理が合致するならば、人間社会というゲームはたやすく調和的に進行し、幸福で成功するものとなるであろう。他方、これらの原理がうまく合致しないとゲームは惨めなものとなり、社会には無秩序状態が訪れるであろう」と言っています。人間社会をゲームになぞらえた上で、普通のチェスであれば為政者、チェスのプレーヤーが駒を動かせるのですが、人間社会というチェス盤では為政者が駒を動かせるわけではなく、それぞれの駒がそれぞれ自身の行動原理に従っており、それ自身が制度であり、その制度というものをよく理解しないで政策を打つと大変な齟齬が生じ、社会に無秩序状態が訪れることにもなってしまいます。そういう観点からも制度というものをきちっとインタラクションの中で考えていかないといけないと思っています。

**――社会の中で、一人一人がどういうふうに活躍できているか、一人一人を分け隔てなく社会が包摂しようとしているか、それを巡って、制度なり市場がどういうふうに用意されてどういうふうにワークするか、そのインタラクションが重要だ、と。**

（松井氏）その通りです。その際、市場も制度の一つですので、それだけを突出させる必要はないし、ましてや制度バーサス市場みたいな対立項のような感じで考える必要はありませんし、考えるべきではないと思います。

## ●異分野交流について

**――本研究プロジェクトを進めるにあたり、異分野の先生方に多数お集まりいただきました。異分野交流について、先生のお考えをお聞かせください。**

（松井氏）いろいろな分野、角度から社会という問題を見るのは、私は大事だと思っています。

ただ、いろいろな角度から見て、見たものをお互いに持ち寄ってみないと、「木を見て森を見ず」、それぞれみんな一本ずつ木を見ているのだけれども、それが集まって森になっているのに木の部分しか見えないこともあるため、そういう意味でいろいろな分野の方が参画すること自体に意味があったと思っています。その際に、言語が違うために意思疎通ができない、相手のことが理解できないというのは大変不幸なことなので、そこは気をつけていただくようにと思いながら司会などをやらせていただきました。

**――同じように考えていたとしても、言語が違う人同士で議論をするのは大変かなと思います。松井先生はそういったプロジェクトを何度も手がけていらっしゃいますが、それはあえて自分に課していらっしゃるのですか。**

（松井氏）私はそういうほうが好きで、新しい視点をもらえ、ほかの分野から学べることのほうが多いかなと思っています。そのためには、言語の多少の違いには目をつぶり、いろいろな分野の方と交わっていろいろな見方をしたいと考えています。

自分と同じ言語の人たちと話しているほうが楽で、居心地はいいのです。それでもいいのですが、皆さんも巻き込んで、別な言語を学んでいただきたいというのがこの研究のもう一つの狙いです。

## ●コロナ禍を巡る問題について

**――本研究プロジェクトでも、真正面からではありませんでしたが、コロナ禍を巡る問題についても議論いただきました。この問題に対して、視点の置き方や論じ方について、お考えをお聞かせください。**

（松井氏）知識が不確定なときは制度の影響をものすごく強く受け、制度によって結果が大きく変わります。知識が確定していると、どんな制度をつくっても似たような対応ができますが、知識が不確定だとどういう制度が捉えているかによって結果がかなり違ってきます。論文では一つの事例として脚気の問題を取り上げ、陸軍と海軍という違う制度下で運用されたことでものすごく違う結果が出たことを紹介しましたが、コロナ問題に関しても、まだ知識が不確定なところが非常に多いので、同じような問題が起こり得、制度によって随分変わり得るところはあると思います。

**――医療の現場では、病床数は多いはずなのに逼迫が生ずるなど、新しい問いを突きつけられて混乱している状況だと思います。これも制度の問題ということですね。**

（松井氏）繰り返しになりますが、国民一人一人の集まりとしての社会が制度というものをつくっており、そこで官僚にできることは限られています。特に今回のような知識が不確定な状況や、今までと違う状況が起こってしまう

と、最適な制度について考えている暇がなく、日々忙殺される中で制度が勝手に進化していく。そこはやはり我々経済学で言う均衡状態ではない状態なので、それには留意して物事を考えていかないといけないのかなと思います。

だから、経済学でコロナの問題について論考はいろいろありますけれども、均衡という概念からなかなか経済学も抜け出さないので、不確定な状況が起こってしまうと、最適解はなかなか見つかりません。おそらく最適解は、コロナが収束して数年、数十年たってから初めて、あのときこうすればよかったといった話になってくるのではないかなと思います。

## ●ゲーム理論の使い方

**――先生がおっしゃる制度には、世の中の多くの人たちが選択をしようとする行動の仕方、振る舞い方なども含まれるのですか。**

（松井氏）「多く」というのをつけるかつけないかというのは、そのときそのときだと思います。だから、多くである必要はありません。

例えば、先ほど紹介した脚気の話で言えば、制度というのはあくまでも軍医制度と言ってもいいぐらいのレベルの話なので、関わっていた人は社会全体から比べればほんの一握りですが、制度の在り方によって多くの人が影響を受け、実際に何千人、何万人という人が亡くなってしまったということがあります。そのため、必ずしも多くの人が取っている行動だけではないと思います。ただ、制度というのは幅広の概念で、多くの人が取っているようなもの、つまり、大通りで赤信号だったら渡らないというのも一つの制度と言ってもいいと思いますし、さっきの医学制度のような狭い制度もあります。制度といったときに、制度という言葉で全部話を終わらせようとするのではなくて、どういう制度かというのをきちっとそこからさらに特定化していかないと、議論が拡散してしまうのかなと思います。

**――人々の振る舞い方というものに対して作用を与えられるものが世の中に存在すると思います。例えば今の状況で言うと、マスコミや報道などが人々の振る舞いに相当程度の影響を与えている気がします。マスコミや報道など、人々の振る舞いに作用を与えるものは、経済学的に言えば何と捉えればよろしいでしょうか。**

（松井氏）作用というのは、個人なり、組織なりの力になっていくのではないでしょうか。それも結局大きく見れば制度の中、小さい制度、狭義の制度を考えれば、狭い制度の外から個人の影響を与えるという考え方はできると思います。

マスコミや報道それ自体も一つの制度という見方は当然できると思います。しかし、例えば、病床数の多寡を考えるその部分は一つの病院制度であり、そこに影響を与えるのがマスコミであったり、政治家であったり、世論であったりします。

ただ、広く見れば、日本社会全体という制度の中では全員がその中に入っているメンバーですから、そういう意味では制度というのは誰が制度の外か中かというのはどの制度を考えるかに依存しているところはあります。

そのため、制度に作用する人たちも含めた制度、そこでさらに作用する制度というものを考えると、無限のチェーンみたいなものができてしまうというのはあると思います。制度はどうやってつくられるか、どうやってつくるか。制度の決め方という問題を捉えたときに、制度の決め方を決めるのはどうするのか、決め方の決め方、それの決め方ということで、論理的に考えると無限退行が起きてしまいます。

物事を明瞭に論じるときにはどの制度か特定化して、その上で、ゲーム理論風に言えばプレーヤーを配置して、誰がその制度に影響を与えられるか、あるいは誰がその制度の中でのプレーヤーかを考える必要があります。

**――現在の不確定な状況下、制度が問題であるということを先生が言われる意味で理解することは容易でありません。誤解を招きやすいような気がします。**

（松井氏）ゲーム理論にあてはめて考えると分かりやすく、ゲーム理論は必ず誰がプレーヤーか、それぞれのプレーヤーが何をできるか、その結果何が起きるか、この3つを記述します。制度も同じで、制度の構成員は誰か、その構成員は何をするか、その結果何が起きるかというのを考えるのが一つの制度の分析の在り方です。

ゲーム理論を使うメリットは、そういった整理ができることです。ゲーム理論のモデルをつくった時点で、モデルをつくった人が誰を制度の中の人とするか考えていて、その人は何ができたかという選択肢を明示し、その結果実際に何が起きたか、そういった考え方で制度を分析するのが、ゲーム理論を使った場合の一つの手法です。

**――そういったアプローチで今起こっていることを捉えるなり、分析するなり、評価していくことで、次に起こったときにどうすればいいか、そういうことが抽出できる可能性が高いということですね。**

（松井氏）そうですね。だから、政策現場の官僚の方々にもぜひゲーム理論的な考え方を、やっておられると思うのですけれども、提示していただいてもいいかなと思っています。

病床問題であれば、コロナ病床を提供している病院としていない病院がプレーヤーであり、ほかにも政策担当者などいろいろなプレーヤーがいて、これを一つのゲームと捉えると、病床逼迫問題も解決できるかどうかはともかく、クリアに見えてくるのではないでしょうか。

## ●政策研究の在り方について

**――今回、第一線の先生方と政策研究を御一緒できたことは当所としてとても有意義でした。政策研究に関して、アカデミックな成果や知見と新しく政策を考えたいときのプロジェクトの組み方について、先生のお考えをお聞かせください。**

（松井氏）一方的に知識を披露するような審議会形式ではなく、双方向のコミュニケーションが欲しいですね。やはりそこは重要かなと感じており、本当はもっと霞が関の官僚の方々にもペーパーを書いていただき、それを通じて交流できればいいのかなと思っています。

官僚の方は日々いろいろな仕事に忙殺されて、学者みたいに暇ではないので、なかなか論文を書く時間を取りにくいと思いますが、いわゆる国際学術誌に出すような論文である必要はなく、そういうアウトプットを考えていただくということが重要であり、それをベースにまた議論ができたりします。学者だと私も含めて、どうしても書いたものがないと評価しづらいと思う人も多く、何か書いたものがあれば、それをベースに議論できるところはあると思います。

**――たしかに昔はいろいろ物を書いたりする方が多かったと思います。**

（松井氏）今はそういった人が少なくなっている感じがします。物を書く時間を与えるというのも重要だと思います。

面白くて有益な論争ができるようなアウトプットをぜひ政策立案の現場からも出してほしい。それは官僚用語ではなく、ちゃんとみんなに分かるような易しい言葉で、かみ砕いたもので出してほしいというのは要望と言えば要望です。

一方で、組織の人間だからここは匿名性を守ってといった意識が昔に比べて強くなっている気がしており、何とかならないかなと思っています。研究と政策立案の現場が乖離しているというのは、もしかしたらその辺りに原因があるのかもしれません。

自由に書いてもいい時間があるといいですね。そうでなければ、どんどん埋没していき、研究者と政策現場とのコミュニケーションが取れなくなっていき、どんどん疎遠になっていくと思います。

逆に言うと、政府としては、官僚がものを言ってもいいような環境を醸成する、それが大事なのではないかなという感じがします。政策の立案担当者が物申さないと、コミュニケーションを取れなくなり、コミュニケーションが取れなくなると研究も政策に生かされないし、政策者の考えも伸びていかないと思います。

## ●研究プロジェクトを振り返って

**――本研究プロジェクトを採点すると何点ぐらいでしょうか。私の印象では、中間生産物というか、このプロジェクトのもっと先に何かがあるのではないかという気がしています。**

（松井氏）おっしゃるとおりだと思います。私は、研究そのものが中間生産物と位置づけており、そういう意味では、私は今回の研究プロジェクトには丸をつけたいというところがありますが、もちろんそれは手前みその話になってしまうので、その評価は私ではなく他の方がされるのがいいかなと思います。むしろ私は野村さんの中間生産物という表現が非常にぴったり当てはまっていて、そこが一つ評価できるところかなと思います。つまり、ここからほかの分野と交流した方がもう一歩飛躍してくれれば、それが一番いいことかなと思います。

（聞き手：内閣府経済社会総合研究所総括政策研究官
野村 裕）

（本インタビューは、令和3年5月14日（金）に行いました。なお、インタビューの詳しい内容は、以下のページからご覧いただけます。

https://www.esri.cao.go.jp/jp/esri/seisaku_interview/interview2021_33_b.html

また、本国際共同研究の成果である「経済分析」第203号は、以下のページからご覧いただけます。

https://www.esri.cao.go.jp/jp/esri/archive/bun/bun_all.html）